

アジアのモデル・世界のモデルに！

全国大学生協連・会長理事 庄司興吉

1 はじめに

皆さん、こんにちは。会長理事の庄司です。全国的にどうやら天候不順のようですが、各地からおいでいただきまして有り難うございます。年に一度の理事長・専務理事セミナーです。このあと、山形大学結城学長のご挨拶、また大学生協連専務理事の和田君、学生委員長の野々村君からの挨拶があり、それらを受けて分科会になりますが、どうか各地の大学生協の状況を忌憚なく出していただき、率直な意見交換をしていただきたいと思います。

私のほうからは基調設定的な挨拶をさせていただきます。「アジアのモデル・世界のモデルに！」というタイトルをつけさせていただきました。私が会長理事として皆さんとこのセミナーでお目にかかるのは3回目です。会長理事3年目になります。一昨年は、その前年、副会長のときからビジョンとアクションプランづくりをしており、それに基づく問題提起をさせていただきました。その後、それを皆さんの会員生協でご討議いただいたうえで、総会で採択させていただきました。今日の資料のなかにも「21世紀を生きる大学生協のビジョンとアクションプラン」の冊子が入っています。

それを踏まえて去年からは、各会員生協のビジョンとアクションプランの見直しや、ビジョンとアクションプランづくりなど具体的な動きが始まりましたので、去年のこの場では「初心に帰って協同から」という問題提起をさせていただきました。

この間、副会長のときから、ヨーロッパ、アメリカ、アジアの大学における学生支援および協同組合の視察などを、大学生協連が前から行ってきていることを踏まえてさせていただきました。視察をつうじて、アメリカやヨーロッパの事情も分かってきましたが、とくにアジアでは大学生協づくりが進んでいます。そしてそういう角度から、日本の大学生協がたいへん注目されてきています。

そのような背景を踏まえての今日の問題提起ですが、去年の10月にシンガポールで行われましたICU（国際協同組合連盟）の場でも、大学生協は、ユニバーシティ・キャンパス・コオペラティブのワークショップを初めて実施し、成功させることができました。その時の私の冒頭挨拶などは、私のホームページ——和文のも英文のもあります——に掲載してありますので、どうか、大学生協連のホームページから「会長からのご挨拶」をクリックし、さらに「会長理事のWebsite」をクリックしてご覧ください。

2 ポストコロニアル・アジアの大学と大学生協：日本の大学生協のユニークさ

さてアジアは、いわゆるポストコロニアルな状態に移行しつつあります。もちろん皆さんご存じのように、一部に問題を残しているところはありますが、全体としてはポストコロニアルな状態に移行しつつあるといい。具体的には、革命後の混乱や開発独裁などを基本的には克服して、各国の実情に合わせた経済成長、それを踏まえた社会づくり、国づくりを進めつつあるということです。

そのために、人材育成のための教育がたいへん重要になってきています。そして大学は、どこでも教育制度のいちばん上に位置づけられていますので、それだけ大きな重要性を与えられるようになってきています。そこで、先生がたが研究し教育し、学生たちが勉強して育っていくために、大学キャンパスへの支援が絶対に必要なわけですから、それをどのようにやるかということに、多くの国が多大な関心と労力を払うようになってきている。この間、インドネシアの大学生協が「協同の協同」、つまり生協間の連携を良くするためのセミナーをやり、それに参加させていただいてきましたが、インドネシアにかぎらず、韓国からマレーシア、フィリピン、さらにはインドに至るまで、いろいろな国で大学生協づくりが進んでいて、そのような点から日本の大学生協が注目されてようになってきているのです。

先ほど申し上げましたように、この間にアメリカやヨーロッパの大学の学生支援、キャンパス支援の様子も視察させていただいてきました。皆さんも多かれ少なかれご存じとは思いますが、アメリカでは、大学そのものが事業であるという意識が強いので、寮や食堂などを大学自身が経営している場合が多く、学生たちには、政府だけでなく民間の奨学金もかなり豊富にあります。私たちから見ると、いちばん近い役割を果たしているのは大学店舗協会(NACS)といい、大学にお店を出して書籍や文房具などを販売している人たちなので、そのような人びととの交流も続けてきました。

ヨーロッパの場合は、国によっていろいろ違いますが、ドイツやフランスでは、DSW (Deutsches Studentenwerk, ドイツ学生互助会) やCNOUS (Centres nationaux des oeuvres universitaires et scolaires, 学生援護会) などの準政府機関が、学生の寮、食堂、奨学金などを一括管理しているケースが主なようです。

それらに比べると、食堂、書籍、購買から住居、旅行、講習会などにいたるまで手広く担ってきている日本の大学生協のような組織は、世界でも非常に珍しいということがますます実感されてきました。歴史的にも60年以上続いているわけですから、非常に珍しいといっていいいでしょう。そういう意味でも、日本の大学生協の成功にアジアの眼が注がれているのです。ですから、今や日本の大学生協がアジアのモデル、世界のモデルになれるかどうかという状況になっている。

3 大学生協が抱える二重の課題：共済問題と連合問題

それに関連した問題提起をここのところさせていただいているのですが、大学生協は現在、非常に大きな二重の問題を抱えています。一つは共済問題、もう一つは連合問題です。共済は、今まで4年単位、いわゆる長期でやってきたわけですが、法律が変わり、1年ごとに更新する短期に切り替えざるをえなくなりました。それから組織的にも、大学生協が事業の一部としてやっているという形では済まなくなってきましたので、組織も分離しなくてはいけなくなっています。これは、共済も言ってみれば保険の一種なので、「助け合いなどと甘っちょろいことを言うな」という、いわば国際的な圧力がかかっているわけです。グローバル・スタンダードに従えということです。そういう意味では、現代世界を支配するウルトラモダンの力のもとに、われわれも置かれているのです。

それからもう一つ、連合問題というのは、会員生協によっては戦前からやってきている生協もあるのですが、多くの生協は第二次世界大戦後にできた。それらが連合を形成して

いく過程で地域ごとにいろいろな問題を抱え込み、連合形態が非常に複雑なままで現在にいたっているという問題です。それをもっとすっきりさせないと、コストもかかりすぎるし、グローバル時代の大学生協として今後の発展への展望が開けない。これは、あえて厳しく言えば、ウルトラモダンにたいしてプレモダンの問題です。

この両方とも、大学生協が好んで抱えたわけではないので、そういう意味ではマイナスの要因です。しかも、二つのマイナス要因を同時に解決していかなければいけない。単純計算でいきますと、マイナスとマイナスを掛けるとプラスになりますので、両課題を同時に解決しつつ大学生協の前進を図れないか、という問題提起をさせていただいているのです。そのために、ビジョンとアクションプランを想起しつつ、理念を確認し、現実との媒介を図らなくてはなりません。

4 生協職員の考案した解決策：機能統合した運営へ

そのさい、大学生協の性格を、皆さん十分ご存じのことですが、もう一度振り返ってみる必要があります。大学生協は、学生、院生、教職員でつくる協同組合です。しかし、学生も院生も教職員もそれぞれの仕事を持っていますから、生協が動きだし、さらに大きくなると、当然のこととして専門の生協職員が必要になってきます。したがって、生協活動の経験者などを雇用して、大学生協は生協職員として育ててきました。

歴史的に見ると、大学生協が育てた、あるいは大学生協を経験した活動家や生協職員が各地域に出ていって市民生協を立ち上げ、今日、大学生協などとは比較にならぬほど大規模な日本生活協同組合連合会、いわゆる日生協をつくりあげてきたということもあります。大学生協としても誇りにしていることですが、その後も大学生協はもちろん生協職員を育ち続けてきています。

その職員たちが、私が今申し上げた二重の課題を解決するための原案をつくってきています。あとで専務理事から詳細を発表してもらいますが、とくに連合問題にかんして、機能統合を推進し、機能統合した運営へというような方向を示しています。共済の短期化と組織分離についても、非常に工夫を凝らした案を考えてきていますが、とくに連合問題については、現在の一部で非常に複雑な事業連合の在り方を機能的に統合し、組織もそれに合わせてすっきりした形にしていくという案を出してきている。われわれがビジョンとアクションプランづくりなどをおして、苦労して明確にしてきた大学生協の理念を非常にはっきりと把握しているから、このような案ができるのだと思います。理念と現実との関係を身体で感じているからこそ、このような案ができるのだといっていいいでしょう。

5 実態概念と機能概念：属性本位から業績本位へ

話が少し抽象化になりますが、理念と現実との関係について考えましょう。「理念的なものは現実的であり、現実的なものは理念的である」というのは、皆さんご存じの有名な哲学者の言葉です。これは、そのようにあるべきだ、つまり当為として言われているのか、あるいはあってほしい、つまり願望として言われているのか、どちらだと思いますか？ 私は、どちらでもないと思います。ヘーゲルが言いたかったのは、考えに考え抜けば、つまり全身体で考え、実践的に考えれば、そのようにならざるをえない、ということだったのだと思います。

私は、われわれの生協職員が考えに考え抜いて出してきた案を、そのようなものとして受け止めたい。そして、皆さんにもそのように受け止めてほしいと思います。

それからさらに、その具体的な案の過程で、「機能」という言葉がキーワードとして使用されているのを見て、私は感心いたしました。というのは、機能概念というのは、われわれの組織、社会などを近代化していくうえで非常に大事なものだと思うからであります。機能概念というのは、物事を、それ自体としてよりもその現れ方、働きにおいて見る。例えば、西洋中世ではすべてが神の被造物であり、神こそが実体でありました。実体というのは機能の対概念ですが、それこそが神であったのです。

それから解放されるために人びとは、その現れ、その働き方、すなわち機能をとらえ始めました。自然の働きを機能的にとらえる。機能的というのはファンクショナルにということで、ファンクションは数学では関数を意味します。機能的にとらえるというのは、数学的にいうと現象を関数関係としてとらえていくということで、それが近代自然科学の出発点でした。

機能的関数的なとらえ方は、やがて社会にも及ぼされていきます。そうするとどうなるか。人びとは、互いを何であるか、つまり典型的には身分などによってではなく、何をするか、した結果何が生まれたか、つまり業績によって評価するようになっていったということです。そういう方向に社会が変わっていった。私の専門の社会学の用語でいいますと、属性 ascription 本位にではなく、業績 achievement 本位に物事をとらえる社会に移っていったのです。

この業績本位の考え方に、判断基準の普遍主義 universalism が結びつきます。身分によって適用する判断基準を変えるのではなく、すべての人間は自由・平等であるという前提に基づいて、同一基準をあらゆる場合に適用していく。それが普遍主義であります。業績本位と普遍主義とが結びついて社会のいわば軸を成していくようになっていったのです。それがつまり近代化ということでした。

6 「である」ことと「する」こと：機能主義と理念の問題

こういう文脈で考えているうちに、私はもう一つのことを思い出しました。「であることとすること」という対比です。少し古いと思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、私のゼミの学生が日本文化の研究をするということでこの本を引っ張り出してきたりしていますので、決して古い話ではないのです。本というのは丸山眞男氏が1961年に出した『日本の思想』というものです。ご記憶のかたも多いと思いますが、その最終章のタイトルは『「である」ことと「する」こと』でした。

ここで丸山氏が言っているのも、基本的には同じことです。つまり、「であること」というのは属性本位のこと、それよりも「すること」を重視するというのは業績本位に振る舞うことです。丸山氏は、第二次世界大戦で近代化に失敗したことが明らかになった日本にたいして、立ち直るために課題の意義を見極めて正しく「する」方向に向かうように訴えたのです。しかも、強烈な理念主義者であった氏は、機能主義が行きすぎると空転してどうなるかということにたいしても、警報を鳴らすことを忘れませんでした。

機能主義の行き過ぎというのはどのようなことか。20世紀の社会主義は、本来の理念に反して非常に属性本位的になってしまいました。一党独裁とそのもとでの党官僚の特権階

級化などがその典型的な現れです。そこで、1980年代以降の新自由主義つまりネオリベリズムは、市場化を進め、機能化を徹底しようとしてきました。米ソ冷戦終結後のグローバル化は、まさにそのように機能化を徹底させるものでした。

けれども、それが歯止めを失って、空回りしてきている。機能の尺度としての貨幣の操作で何ごとでもできるかのように考えるのが、いわゆるマネタリズムです。ヘッジファンドなどが世界中でやってきているのは、そういうことです。営為を機能化していく必要はあるのですが、機能主義を空転させてはならない。学生同士の助け合いやキャンパス生活の維持のしかたなどを協同組合に任せないで、いろいろな企業を導入してやっていくなどというのも、言ってみれば機能主義の行き過ぎの現れでしょう。機能主義の空転は大学生協にも大きな影響を及ぼしてきているのです。

それを抑えるには理念の力がどうしても必要です。しかも、神のごとき実体としての理念ではなくて、組織の目標と実現方法、すなわちビジョンとアクションプランとしての理念の力が必要です。理念に即して組織の実態を把握し、しかもそれを実体視せずに——あとのほうの実体は、前のほうが reality であるのにたいして substance や entity ですが——、つまり絶対視せずに機能的に対処していく。理念に即して組織の実態を把握し、それを実体視せずに機能的に対処していくことが必要なのです。

7 協同主義と連合主義の相乗関係：大学生協を「する」方向に

では、その理念とは何か。ビジョンとアクションプランをつくる過程でも繰り返し申し上げましたし、昨年もここで申し上げましたので、基本的に繰り返す必要はないでしょう。もう一度だけ簡単に言うと、協同主義と連合主義の相乗関係をつくり出すということです。それこそが、ビジョンとアクションプランに掲げている理念のエキスです。

どういうことか。共済問題はすでに述べたように進めざるをえませんが、それと生協の日常活動を踏まえて、各単位すなわち会員生協がそれぞれの場で確実に協同を実践していく。そして、協同・協力・自立・参加の好循環をつくりだしていく。それがビジョンとアクションプランの精神ですが、それを具体化しながら互いに連合を形成して、連合から得たほうがよいものはそこから得ながら、しかも各単位すなわち会員生協が、地産地消などいろいろな形をつうじて個性を出していくのです。

私はパワーポイントで絵を描きたかったのですが、その時間がありませんでした。大きな円が連合会であるとする、それにそれぞれ最適にかみ合った多数の小さな円があって、小さな円が回転することで大きな円も回転していくような、そういう絵を描きたかったのです。それこそが、いわば協同主義と連合主義との相乗関係のモデルです。現在、事務サイドが提案してきている連合問題解決の方向は、そういうモデルを目指して、現存の中間的な連合の機能的な統合を進めていき、機能的に統合した運営を進めながら連合の形をすっきりさせていくということでしょう。

これを最後にもう一度要約すると、「である」ことにこだわらず「する」ことをしていく、ということです。共済問題では、すでに法改正がなされていますので、「である」ことにこだわって対応が遅れてはいけません。そのための問題提起もあとからあるはずですが、また、連合問題のほうも、これは法改正に強制されているわけではありませんが、グローバル化という大きな力のもとで大学生協が生き残り、強くなっていくために、できるだけ早く解

決していかなければいけない問題です。

そのような意味で、日本の大学生協を前向きに「する」方向に生かしていく。そういうことをつうじて、アジアのモデル、世界のモデルにふさわしい形態と内容のものに変えていかなければならないのです。このあとのお話しや問題提起を踏まえて、ぜひそのような方向に積極的な議論を展開していただきたいと思います。

8 電子情報市場化の逆用：ホームページの活用を！

最後ですが、私は、グローバル化とは電子情報市場化だ、と言ってきています。その電子情報化の要がインターネットのはずですが、その使い方がまだまだ弱い。大学生協連についても、皆さん、どのくらいの頻度でござんになりますか。いつ見てもページが変わり映えしません。それでは困るので、「もっと何とかしろ」と私はかねてから言ってきています。毎日更新するのは、新聞社などと違って大変ですが、大学生協の動きをもっと生き生きと伝えていかななくてははいけない。

こういう時代ですから、学生たちも、新聞などよりもはるかによくネットを見るはずで。そういう学生たちに、大学生協の日々の活動をもっともって生き生きと伝わるようにしていかななくてははいけない。これは各会員生協のホームページもそうですが、大学生協連のもそうです。

日本の大学生協はアジアのモデル、世界のモデルになるのだと言っているのだから、せめて国際的な通用性を持ったホームページをつくれということで、今年に入って英語のホームページを立ち上げさせていただきました。ぜひござんいただき、いろいろとご意見があったら寄せていただきたいと思います。

それから、冒頭にも述べましたが、日本語でも英語でも大学生協連のホームページを開いていただきますと、「会長理事からの挨拶」というアイコンがああって、それをクリックしていただくと私の簡単なあいさつが出てきて、そこから会長理事のページにリンクできるようになっています。そこに、私が毎回の理事会で話をしたこと、地域センター会長・事業連合理事長会議で話をしたこと、またこのようなセミナーで話をしたことなどを、基本的にはすべて後から手を加えた形で、きちんと読めるようにして載せてあります。それらもぜひござんいただきたいと思います。

それらのものを積極的に活用しながら、今回のセミナーでの活発なご議論などを踏まえて、それぞれの会員生協に戻られたら、理事長専務理事セミナーに行ってきたら生協が変わったと言われるように、ぜひ各地で頑張ってくださいと思います。以上をもちまして、私のあいさつとさせていただきます。どうもありがとうございました。

(2008年8月30日、理事長専務理事セミナー)